

漢
莫
鐵
粉

分館

七
五
井



蝦蟇鐵拐



かゝり 鉄 蟻 蝦

昭和二十七年一月二十日 印刷
昭和二十七年一月二十五日 發行

定價三八〇圓

著者 吉井 勇

發行者 栗本 和夫

東京都千代田區丸ノ内二ノ二

印刷者 山田 博

東京都板橋區板橋町十ノ二四八四

發行所 中央公論社

東京都千代田區丸ノ内二ノ二
丸ノ内ビルディング五九二區
電話 和田倉一・二二一
振替口座 東京三四番

目次

長谷詣

一

蝦蟇鐵拐

七三

八幡の文反古

一二一

淀の文反古

一四九

八瀬の文反古

一七五

虎落笛

二〇一

蘭蝶風邪

二二三

島原狐

二四九

長谷詣

「さあ、もう次ぎが長谷寺やさかい、忘れものないやう支度しておき。」

「へえ、もう降りるんどすか。」

「そやそや、八木から五つ目、耳無、大福、櫻井、朝倉、それから今度が長谷寺や。」

「よう驛の名おぼえてゐやはる。ラジオのほれ、ああ、さうさう、話の泉にでも出やはるとええわ。」

「しやうもない。何云うてるんや。あてえは商賣柄、よう博物館などに入りしてゐたよつて、古美術をやらはる先生方と、室生や長谷には何度往たか知れへん。そやさかいここらは詳しいのや。」

「そやそや、今日も室生へ泊らんなん云うて、何も知らん佛さまをダシに、よう家を明けたな。どないな佛さまかわからへん。」

「阿呆らしい。勿體ないこと云はんとき。」

「そやかてそないなことあつたんやもん。」

「もうええ、もうええ、ええ年をして何云ふのや。ああ、もう着いたやないか。早う降りんかいな。」

「ああ、えらいこつちや。あてはこつちやの袋提げるよつて、あんたは鞆を頼みまつせ。」

忘筌堂の老夫婦——喜兵衛とおぶんの二人は、電車が長谷寺の驛に着くと、二人ともいつものあわて癖から、まだすつかり止まらないうちに座席から立つて、よろめく足を踏みしめながら、眞つ先に扉口から降りて往つた。

昨日で土用が明けたので、もう祇園祭時分のやうな、茹だるやうな暑さはなくなつたが、それでもまだ残暑がきびしく、京都驛の奈良電のプラットフォームで、橿原神宮行の急行を待つてゐる間でも、幾たび額の汗を押し拭つたかわからなかつた。「あんたは汗性やよつて、ええ着物着せて上げて、一度でもう着られんやうわやにしやはる」と、いつもおぶんからは夏になると、こんな小言の云はれ通しで、今日の長谷寺参詣にも、昔ものの少々色の褪めた黄の麻帷子に、幅の狭い獨跼の入つた博多の帯、それに忘筌堂ごのみと人から云はれてゐる、十徳仕立の丈の短い、

黒絹の羽織を着せられてゐた。おぶんの方も人並以上、衣裳大事にする性なまなので、法要の時には着替へることにして、まだ暑い長谷寺までの道中には、二十年も前につくつた古い觀世波のある越後上布、それに木賊模様のある麻の帯を締め、降りるともう色氣もなく、白いボイルの長襦袢を、あらはに出して裾をまくつた。

地下道を通つて驛を出ると、そこは「氷」と書いた旗を立てた休み茶屋が、三軒ばかりあるだけの殺風景な廣場で、直ぐにまた街の方へ下つてゆくための石段があつた。降りてゆくと直ぐ下の櫻の木の下に、六七人何かを圍んで人だかりのしてゐるのを、何だらうと思つて覗いて見ると、それは噂に聞いたハッタハッタとか何とかいふ、街頭賭博の一種をやつてゐるらしい。何かしやべつてゐる派手な格子縞のアロハシャツを着た若い男が、何か云ひながら振り上げた腕のところをちらと見ると、半袖からはみ出した手首のところには、羽をひろげた蠅の青黒ずんだ刺青がしてある。

「あれ、何です。」

「ああ、あれかいな。ハッタハッタとやらいふ博奕ばくちや。」

「へえ、長谷寺といふところはえらいとことすな。」

おぶんはさう云つてから不圖思ひ出したやうに

「芝居でやるいがみの權太がゐやはつたんのんも、こころあたりと違ひまつか。」

「ああ、あれはちよつと方角違ひや。さつき八木で乗換へずに、ずつと權原神宮まで往て、あれからまた吉野行の電車に乗換へてゆくところや。權太はそのすし屋の極道息子なんやで。」

「ああ、そやそや、いつぞや文樂で見た人形淨瑠璃に、あのすし屋の場があつたやおへんか。ほんまによろしおしたなあ。あれ語らはつた太夫は誰やつたか知らん。」

「さあ、誰やつたらな。今の山城はんが古鞆時代のことやなかつたやろか。」

「さあ、あてえあんまり文樂見せて貰ひまへんさかい、ようわかりまへんけど。」

「あてもすつくり忘れてしもた。たしかあれはあんたと一緒になつてから間もなくのことやさかい、今からもう廿四五年も前のことや。」

「さうどす。まだ房吉が生れん前どすさかい、おほかたもうその位、いやもうちよつと前になりますやろ。」

「さうやな。房吉が達者でゐたら、今年はもう廿六になるのやさかい、もう廿七八年も前になるのかいな。」

「えら昔どすなあ。まだ世の中がのんびりとして、ええ時代としたえ。」

「そやつたなあ。しかしあの房吉も、そないな時代に生れた子やよつて、何處かのんびりしたところがあつたやないか。」

「さうどす。あの子も今の人達から見ればけつたいたところのある變り種どすやろ。芝居も新しいものは嫌ひで、歌舞伎や文樂が好きやつたし、稽古といへば地唄や狂言に身を入れはるし。」

「それに古い佛像が好きで、學校の休みといふと、きつと方々の寺めぐりや。」

「そらあんたはんの商賣が書畫骨董やさかい、血すちは争へんといふもんどつしやろ。」

「やつぱり蛙の子は蛙かいな。」

喜兵衛はさう云つてちよつと苦笑ひをしたが、そこは石段を降りつくしたところで、それからはずつとなだらかな坂路になつてゐた。不圖見ると往來の人の目につくところに、「ハッタハッタに近寄るな」とか「油斷と慾は詐欺の餌」とかいふやうな、場所柄に似合はず、不風流な文句を書いた掲示板が建てられてゐたが、これで見ると、現在そこでやつてゐたやうな街頭賭博は、かういつた大和の由緒のある町でも、盛んに行はれてゐるらしく、これも敗戦の結果かと思ふと、日本がかういふことになるとも知らずに、臺灣沖の海の藻屑と消えてしまつた房吉が、不憫に思

はれてならなかつた。

「えらい世の中になりよつたな。清少納言がこないなところ見やはつたら、何と云ははるやろ。」

喜兵衛はさう云つてから、不圖氣が付いたやうにおぶんに訊いた。

「あんた清少納言知つてるやろ。」

「へえ、知つてます。あの枕草子たらいふもんを書かはつた、昔のえらい女はんどすやろ。」

「さうや。あの枕草子にも、この長谷寺のことが書いてあるんやで。あの時分はみんなええ人ばかりやつたさかい、ここの観音様を信心するものが多うて、京都あたりから攝政やら關白やらいふ人達までがはるばる參詣に來やはつたもんや。」

「へえ、さうですか。その時分は汽車も電車もあらへんやろし、みんな遠いところを歩きもつて來やはつたんどすやろな。」

「さうや。そこが信心やがな。それが如何や。今では驛を降りると直ぐ、アロハシャツとやらいふもん着た、權太もどきの兄ちゃんあにが、ハッタハッタと云うて人を呼びよる。それもみんな房吉と同じ位の年恰好やないか。それを思ふとあてえには、何やら一層情なうなつて來るんや。」

「ほんまに情ないこととすなあ。祇園町の舞妓はんかて、近頃は昔と違うて、自由やら何たらむづかしい理窟云うて、屋形を困らせはる子があるさうにおつせ。」

「ほんにあてえもせんと末吉町の吉君のおかみに會うたら、まだ襟替もせんさきに、別府あたりまで男と駆落をした舞妓があつたさうやで。」

「おお、怖^{おそ}は。これもやつぱり時勢とつしやろなあ。」

「さういふのんにくらべると、房吉が好きやつた春菊などは、やつぱり普通りの祇園町らしい舞妓やつたやないか。」

「さうとす。それに若死するだけあつて、ほんに賢いええ子としたなあ。」

そこはまだ坂の中途だつたが、松の木の多い小高い丘の向うには、長谷寺の伽藍の屋根が、秋が立つたといつてもまだ暑い、烈しい日射の中に薔を光らせて、黒くくつきりと輝いてゐる。二人の話が途絶えると、そこで鳴きしきつてゐる蟬の聲が、じいんと身にしむばかり耳につく。

「ああ、お寺の屋根が見えて來ましたえ。あれが本堂とすか。」

「いや、本堂はもつとずつと上やさかい、あれはきつと大講堂やろ。」

「さうとすか。ほんなら本堂までは、まだ大分あるのとすやろなあ。」

「さうやな。この坂を降りきつたところが初瀬川で、それから町を五六町往たところにお寺の山門があり、それからまた長い廻廊の石段を三百いくつも登らんならんさかい、女子の足にはちとしんどいかも知れへんな。」

「へえ、石段が三百いくつもあるのどすか。仰山あるのどすな。」

おぶんはさう聴くと、何だか急に足が重くなつて、そのままそこに坐り込んでしまひたいやうな氣持になつたが、そこには腰を下ろすやうな石もなかつた。それでまた思ひ直したやうに、提げてゐた袋を持ち直して歩いて往つたが、坂が盡きると橋桁もないやうな危つかしい橋があつて、その下を流れてゐるのが昔から歌などで名高い初瀬川だつた。これも今では見る影もない濁り川で、橋の上に立ちどまつて川下の方を見ると、川岸にある宿屋の庭の百日紅の花が眞つ赤に咲いて、直ぐその下の浅瀬のところでは、子供達が四五人泳いでゐた。

「昔は野崎まゐりのやうに、船でも長谷寺まゐりをしてゐたといふことやが、その時分はこない汚ない川ではあらへんやつたろな。」

「さうどすやろ。これよりも白川の方が、どの位綺麗なか知れへん。この川ほんまに初瀬川どつか。」

「さうや。ほんまにこれが初瀬川や。しかし考へておみ。萬葉集の歌なんどにうたはれたのは、千年も前のことやさかい、この位の變りやうはあたり前や。現在あてらにしても、ここ十年の間の變りやういうたらどないやつたる。房吉は戰死するし、堀川の弟の家は分散するし、伏見の叔母はんは氣が變にならはるし、あてえら二人がかうして無事に生きてゐるのが、まだしも見付けもんと云ふもんや。」

「ほんまにさうとすなあ。」

橋を渡つてから右へ曲ると、そこはもう初瀬の町で、ずつと長い一筋みちの街通りがつづいてゐる。この前喜兵衛が町内の人達と一緒に來た時は、丁度牡丹の花盛りだつたうへに、日曜と祭日と二日つづきの休みだつたので、電車の驛を出てから長谷寺に着くまで、牡丹見物の人達が絡繹とつづいて、酔つて流行唄をうたひながら歩いてゆく若い男達や、けばけばしく着飾つた娘達で賑やかだつたが、今は丁度農繁期だつたので、近在から出懸けて來る人も少く、それに近頃では廻路の數も減つてゐるので、ずつとはづれの方まで見渡される往來の上には、殆んど人影がないといつてもよかつた。平安朝時代の物語や日記などで見ると、當時の貴紳はもとよりのこと、庶民達の間でも長谷詣は、春日詣と同じやうに、是非しなければならぬ年中行事となつてゐた

らしく、昔はこの初瀬の町も、もつと榮えてゐたのであらうが、今ではもう唯の大和路にある田舎町で、別に何といふ特色もなかつた。しかしやつぱり初瀬といふ、古い名前を持つてゐる町だけに、兩側の家の標札を見てゆくと、「嚴整」とか「磯城」とかいふやうな苗字もあつて、家々の屋根の形や格子の色も、見るものの心持に依つては、何處かに遠い昔を思はせるやうな風情がないでもない。喜兵衛は商賣柄骨董屋の前に来ると、何か掘り出し物はないかといつたやうな顔付で足を留めたが、ひとわたりそこに並べてある壺の類に目を通すと、そのまま又重さうに鞆をぶら下げて、「右いせみち」と刻んである道しるべの石を横目に見ながら、午さがりの路を歩いて往つた。

眞つ直ぐにつづいたひと筋みちを突き當つてから、兩側に宿屋や土産物店のある道を半町ばかり往くと、そこはちよつとした廣場になつてゐて、正面の石段を上がつたところには、一山の總門である高い山門の立つてゐるのが見えた。

「ああ、ここや。」

喜兵衛は思ひ出したやうに、ひとりて何か點頭うなづきながら、おぶんの方を振り向いて云つた。

「ほれ、この春牡丹見物に来た時に、けつたいな盲目の女乞食に會うたと云うたやろ。」

「へえ、そないな話たしか聴かせてもらひましたえ。」

「その盲^{めくら}目の女乞食は、この山門の前の石段の傍に、じつと寂しさに坐つたまま、年に似合はぬええ聲で、しょんぼり唄うたうてゐたんや。」

二

その目の盲いた女乞食は、年の頃五十二三歳位にでもなつてゐたであらうか。乞食といふのにしては、容貌に何となく氣品があり、何處やら能面の「深井」に似たところがあつて、鼻筋、額つき、額のあたりも、勿論垢や埃りのために、どす黒い皮膚とはなつてゐるけれども、誇張して云へば古い乾漆佛にでも見られるやうな、彫刻的な美しさが、仄かながらも感じられるのであつた。ひたと盲いた兩眼の瞼が、おのづからつくつてゐる寂しい陰翳にも、何となく心を惹かれるものがあつて、喜兵衛はその女乞食を見ると、伴れから離れてしばらくの間は、思はずその前に立ち留まらずにはゐられなかつた。

「何か由縁^{よし}ある女に違ひない」と思つて、そこに立つてじつと見てゐるうちに、膝の上に置いたぼろ三味線を、手垢によこれた撥で掻き鳴らしながら、低いかすれたやうな細い聲でうたつて